

【京都府青少年育成協会会長奨励賞】

「『できない』から『できる』へ」

舞鶴市立城北中学校 3年
高橋愛芽



私は、1歳の頃から1型糖尿病という病気になった。私は夏に、糖尿病の人たちが集まるキャンプに行っている。そこで、

「病気だから、できないって言われた。」

という声が聞こえた。

その時思った。「病気だからといって『できない』と判断されるのはおかしい。」と。

サマーキャンプには、みんなが楽しく過ごせるような行事がたくさんある。海水浴、ドッジボールなど、健康な人と同じように動いたり、遊んだりできる。また、糖尿病の人たちだけが集まるキャンプだから、日常の様子や困っていることを交流することができる。

「しんどい時に、助けてもらった。」

と明るい意見もあった。逆に、

「病気なんやったら、やらんでいいよ。」

と、自分の行動を否定されているような意見もあった。その時は、自分はできるのに。すごく悲しい気持ちになった。

しかし、糖尿病という病気になってしまったからには、やらなくてはならないことがある。それは、食前に血糖値を測ることや、インスリン注射を打たなければならないことである。糖尿病ではない人からすると、大変そう感じるかもしれない。でも、糖尿病になったからには、欠かすことのできないことなのである。

私は、1歳からこのインスリン注射を行っているので、今では30秒で終わらすことができる。たまに、面倒臭いと思うことがある。しかし、これを怠ると、死んでしまうかもしれない。だから私にとって、血糖値を測ること、インスリン注射を打つことは命に関わる大事なことなのである。

糖尿病を患っている私でも、できることはたくさんある。習い事では体操、学校では生徒会をしている。生徒会では、全校集会を進めることもあり、私はその日、司会を務めていた。すると途中で、インスリンポンプのアラームが鳴った。どうしようかと考えていると、先生にそっと、

「気づいてないから、そのまま進めな。」

と言ってもらった。きっと皆は気づいていたと思う。でも、何事もなかったかのように私はそのまま司会を進めることができた。先生や周りの人がアラームで驚くこともなく、普通に接してくれたことが、まるで当たり前のようにとてもうれしかった。また、普通の人と同じように扱ってくれたことへの喜びが胸にこみあげてきた。そのまま、続けようとしてくれたことは、私を司会者として認めてくれたからだと思う。

私のように、病気を患っている人は世界にたくさんいる。だから、「病気だからできない」と言われるのが嫌だと感じている人もいるにちがいない。病気でない人にとって、「病気=できない・動けない」と思っている人がいるのかもしれない。しかし、今この瞬間から考えを変えてほしい。人間は、たとえ病気を持っていても、気持ちさえあれば、健康な人と同じように動いたり、物事をやり遂げたりできたりするのだ。糖尿病の人だって、血糖値を測り、インスリン注射を打てば、プロ野球選手だって目指せるのだ。だから私は、病気を患っていて、辛い思いをしているような人は1人でも減ってほしいと願っている。

私はこれまでたくさんの人に支えてもらった。家族、友達、先生などたくさんの人にお世話になった。特に、私の血糖値が低くなったときにはすぐに助けてくれた。今まで助けてくださった人たちに「ありがとう」の感謝の気持ちを伝えられる人になりたい。

また、私には大きな夢がある。それは、世界中にいる多くの病気を抱えた人たちに、大きな希望を与えることである。糖尿病という大きな病気を持っていても、「やればできる」ということを証明することだ。私の母も糖尿病でありながら、看護師として働いている。母が医療の世界で働いているので、私も医療の世界で働きたい。私は、いつか助産師になりたいと思うようになった。夢を叶えるために、まずはコツコツと勉強したい。いつか世界中の人たちに、「糖尿病の人でも助産師になれた人がいるのだ」と、勇気と希望を与えられるような人になりたい。